

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

## ヤスィックアケルの蒼い空 10 C1への荷上げ道 その2

昨日の偵察隊の情報をもとにセラック攻略の最も効率的なライン取りは氷河の左岸のシュルンドをしばらく進み、5200m付近で一旦氷河から離れ、右の沢（上部の平坦地形から通称「広河原の沢」と命名）伝いに詰め、上部で氷河のサイドモレーンに登り返して、氷河に出ることだろうと結論づけた。9:00にはその広河原の沢にとりつく。この沢は、地図上の顕著な右股であるが、上部に氷河がないので、アフタヌーンフラッドの心配もない。氷河から分岐して沢を登りあげると、まさに「広河原」と呼ぶに値する気持ちのいい台地（5300m）に出る。ここから氷河のサイドモレーンと右岸の斜面の間を流れる沢を詰め、最後にサイドモレーンに乗り、そこから氷河に取り付いた。氷河に取り付く地点には昨日の偵察隊が固定ロープを張ってくれてあった。このあたりから雪が激しくなってきたのでカッパを着る。

固定ロープを頼りに30mほど段差のある氷河上に出る。氷河の上はアイゼンが気持ちよく利いて歩きやすいが、何せこの高度である。一步一步が重い。12:00 昨日の最高到達地点（5555m）に到着。BCのヌルさんと定時連絡の後、更に上部を目指す。未知の氷河であるので、



原則的に行こうとアンザイレンし、コンティニューアスで進み、5600m付近まで荷上げした。この地点は大ざっぱに言うとも、頂上からの南稜の始まりの地点、言い換えればこのリッジによって分けられている左股氷河と右股氷河の合流点である。我々はこれまで、本流とも呼ぶべき左股氷河を登って来たが、ここから

右股氷河に乗り換える。ここはその分岐点になる地点である。想定よりやや標高が低いものの、ほぼタクティクス通りにC1を設定することができた。ここから右股氷河を眺めると、標高差300mほどの急斜面が待ち受け、大きなクレバスが縦に横に口を開けている。いよいよ山の懐に入ってきた感じで、闘争心が掻き立てられ、メラメラと気持ちが高ぶってくる。生憎ガスっていてその先は見えなかったが、こちらは明日のお楽しみ。

12:40、下山開始。14:30にはABCに到着した。今日は雪模様で日差しがないので、アフタヌーンフラッドはなく水は澄んでいる。ABCでは久根さんが紅茶を湧かし、オリジナルの「もずく入りわかめたっぷり卵スープ」を用意して迎えてくれた。こうして荷上げルート確定、C1の位置決定と二回目の荷上げが終了。天候は悪かったが内容のある一日だった。その天候も16:00ごろには回復。唯一の心配のネタは小生の頭痛なり。

## 久根さんとビデオ、そしてABCへの嬉しい来訪者

7月28日。昨夜は満天の星が瞬き、放射冷却で朝は結構冷え込んだ。温度計は最低気温を0度と記録していた。荷上げは今日で3回目となり、これでほぼ完了となる見込み

である。しかし計量すると佐藤、三戸呂両君の荷物は20kg超。若い二人とはいえ、あまりに負荷が大きい。馬力に任せて無理は禁物と荷物を少し分担する。結果小生の荷も15kgとなった。本日はNBSのビデオ撮りを集中して行なう。カメラの担当は久根さんである。随所で先行、そのまま隊の通過を待ち、後ろから押さえる。時には引きの絵やアップをとるために隊と離れたり近づいたり、この高所、荷物を担いで作業は容易ではないはず、今回の久根さんは、裏方に徹してくれて本当にありがたい存在である。

久根さんとは丸子実高と一緒に赴任して以来の長い付き合いになる。1991年の訪中隊でも、2000年のカシタシ隊、そして昨年の偵察隊でも一緒に夢を追ってきた。僕にとっては最も頼りになる山仲間の一人である。今まではいつも初期の順応に苦しんでいたが、今回は最初から順調で一昨日も若い二人をうまくリードしC1へのルートを開く牽引者となってくれた。一方で山内君が去った後の装備係役を自ら買って出ってくれるなど、隊にとっても頼りになる存在である。ビデオ撮りについても、NBSの後援が決まった直後の日本での合宿からずっと担当してくれている。苦しい中で、先行し、数秒間とはいえ息を止めながらのビデオ撮影はスチル写真を撮る以上に大変なはずだ。もちろん報道隊員として参加している信毎の佐藤君の仕事が楽だという訳ではないが・・・。

さて、昨日開いた道を辿り、氷河に登ると、昨日降った新雪が10cmほど積もっている。時折アイゼンの下でダンゴになって歩きにくい。昨日は見えなかった頂上が今日はいくっきりと見える。手の届くところまで来たとも思えるが、しかし氷河を歩く苦しさからすると気の遠くなるような遠さにも思えてくる。だらだらと長く続く氷河の上をおよそ1時間、5500mを越えるというのにおよそこの標高とは思えないような暑さにも閉口してしまった。12:40、C1着。この頃からまた猛烈な頭痛に襲われて、動くのが億劫になった。しかし、下山する前にC2への道筋もつけておきたい。「三戸呂、ちょっと付き合い合ってくれ。」と勇を鼓してアンザイレンし、二人で偵察に出かける。左股氷河と右股氷河の間には結構な水量の水が流れていたが、右股氷河へ渡るのはそれほど難しいことではなかった。氷河の渡渉点付近から見る限り、この渡渉点に安全に渡るルートを確認し、クレバス帯の続く標高差300mの急斜面を乗り越えれば、登頂も見えてくると思われた。荷上げは順調に進んでいる。しかし、入山以来休養日なしでここまで突っ走ってきたせいか、みんな疲れている。僕自身もC1からの下りは、足の脛に豆ができたのと頭痛で最悪だった。

そんな疲れた僕らに嬉しいことがあった。僕らがABCについて休んでいるちょうどそのとき、なんとBCからヌルさんとグリさんが差し入れのスイカを持って上がってきたのだ。久しぶりのフレッシュな食べ物は、疲れた身体には何よりのご馳走だった。しかし、それより何よりわざわざ来てくれるという行為そのものが我々の気持ちを大いに鼓舞してくれた。ちょうど、礼拝の時間になったので、西に向かっていつも通りの



の礼拝をしたヌルさんは、「みなさんの登山が成功するように毎日アラーの神にしっかりお祈りしています。今もお祈りしました。」と言った。今後の予定などを1時間ほど話した後、僕らの無事と安全を確認した彼らは、16:40すでにアフタヌーンフラッドで増水が始まっている沢をBCに向けて下っていった。ヌルさんから無事BCに到着したという無線のはいったのは、18:10のことだ

った。